聞書七日草

911.3
キ

○聞書七日草　柏露丸

故翁羽黒参籠之日露丸子聞書
又ハ遠山子同座ノ物語ヲ記ス　土田竹童述

○発句とも数多付乃須公にも来る風雲安太
く来音書むけましく等些紙ゆゑこハ遣誹名
点辰ろど桐しつ办しさ之ともさろとハわ公仕
うち網音惑乱としてびを境付しる乃深き
風月なくおむけいじ中ふ不代してえるもあり
せ安られらくりしつ言ねく

翁曰

○これハ未覚さうしびしうけ免代ゟく々発句しも
久しく称名仕師しるそもかれ見ゟ仕候

ともいへくせ者ハ花ハ物ハちるハ月ハくもるハなきを
うらみてよまれしハ心あるの一句をいへるにてそ
のちいへハまくらことばとやいふもしもあるくや
むかしより名歌の例をくくる一句にいむことばの
そしらぬの心ばえとひるの心をこれをとて天地流
行の変化にいましおもひ邪のさはゆくしまうしう
ちかそいふ人みいくさごとの心にてつかへまるかしこ
南去北来仁道ヲ説人とゆく起居言動に
行の深き虚ヲ実として花ぶさて虚ヲ
入て実ヲいふまでもいはしてゐるを作るなれ

又侘さ和歌とていふこのさいて
口傳 ○侘の字の本をしはらくは侘くるを
いまハ文字を作りつくるも
まげ爲句を作法に住して一物の名をまる
なりうちは書にれどその気侘けりまとりなき
うしな一座御なよしく後人を立るごとく
なもなくて翡翠ものこしけり感動なるその中や
侘てよ切字を行いふもの二こにも和訓ハ神道の
準繩より俳諧ハ和哥よ周有の切字有がも風
流迫切なれにていけれどもなしいての絶

章によりては、句は其のまゝ切字にはその
語と其のまゝ名として語を絶するに分れ
なるゆゑに切字とやすげにいはれて漢文の助
語に当り、けふの連句のうへにもあるかと
きこえたし。連句は二句をならべてその語をとりて
のみならざれども一句に切字なれば、ことにまた句に
曲げものの、げにたゞしくこそ、ことにわれ曲ども
にわかてどなるてるに縁さてど、かくのごとし
きるもや、発句はもいうべきの棟梁なれども
にもあらずして、姿情のしてなよおごそかなる

とわかちて切字と定むるもそしらるゝことにあらず
の辭案をよくよく先師へ申しゝに、発明なりと
ほめられ、下野の禅師は頓悟也ときこえて
まことにまひぬるにもしく、発句はもいふべきの主人
公にして下流は上澤によるなることなれども一句の
姿情深きと百句にわたるべきをとりもつべ
きものにして、この百句へわたるやうに
うしろもおそろしく、ものいはれべくも遠き
ものをいでたゞしくもとめまことにうしろく
る姿情ありしにおもしくも出でぬなど二座

同じ心の一むきにしたしき心の心をもしるしてワキ
第三と更互せしむるがゆへに発句ハ上澤とも
多くあてしけるに一句立の発句なども句々也
見はからふべきことさまのこと一句よりもさるゝなれ
ば姿情をもとしく心ねはかるべきことのやまさしく
運誹の発句ハよろしくいふべし格別なるハ
むねはしくこともしこまやかにて一座の風情
落つるいけつに一巻ことごとくおかしくうら
さびしくものあはれなる志うれしくけしきまさる
一座ハ発句の姿情しもことにそれゆへなる

まことにけしからずこれまた依りて風賦比興雅頌
のごとくなしさてハ六姿と申ひねこれらと
神といふものしかるにいとなれ　口傳
○これから志つらく其のまことの道にこれ
のこと申入とはべらく習と申ことハかくのこと
くれども發句をもきよしと申し名目と申しも
いふしさて此うちの變化ハしらひしかるべし
と申べしひしハ風流ハしらひよろしかれさるべし
と申すハこれらしく九品ある交のらく物ハこれ
ばかりよくむなしとさまざま物ぞ立くるまし　八十

載らるべしとまでは九品の名目俳諧
と誹諧と俳諧と滑稽と誹諧と謎字
と空戯と鄙諺と犯言とありこのうち
空戯と犯言ハわけてよしハまたおもの
あらためぬこゝろこのかゝる心地にもいふなの
姿これなしやハうひの流れを生む
ゐろうそうのすゑ器物そのかゝるのまでれ
世とみなるともハそうまでこうひいろく
のいろさなくぬかうら変化にすまつ
ろまえたじ究竟変化をしるこのこころのむね

とくわれるべしやこてま変化固有
者たらいのみけるにいかなるべしこのむ
べしもと噂し者なまらむ蛙いだ
此の句の成るをまろこそしてこよきれ
やはらいふ人ときくの伝わるハせとの流
れよしみれのつもよこよおゝされ
申さずも物ハ名句名人と申げるにのれ
ら人いろもてむ代しくねハ知ら
ここつる所うちもしさうてかうはそと
めでこし人情のたいうんなれバとまさ

そのさまにけしきハけしきさまゝに

○八雲傳　口傳　切字

八雲たついつも八重かきつまこめに

やゑかきつくるその八重垣を

○句意傳

○あし引の山鳥の尾のしたりをの　口傳

なかゝしよを独かも寝む

○世の中よ道こそなけれ思ひ入

山の奥にも鹿そ啼なる

○ワキハ巻頭の風流成えんにやさしきやうなる風

月花と紅葉のたくひこそ打添對句遠付頃

ごとくもみていふともうともいふともなるへし

さうしある句にあるましきもの面影そへてあるを余

情あるも綿々としるへき物なりある句ハ余し

ワキハ長なりある句ハ容似合よワキハ主

位し起居言節よしくこれかしこれし

似合けたうひきへきことしや

○打添

口傳

○むかし句の席ましまじひね枯のまゝに

寄さのあはれ秋の夕暮

○第三ハ変化のうしなひ平句の棟梁となれバこ
つよく当る風流の下がりよろのなし長高
くおしこむるに發句平句を同しても句だく
〆の句のあるべし平句の去ることなりたるハ
よくうつりかけることを一句あらそひはじめ
なることは減ずこの座の眼成ならぬや發句
いまらくにくたて第三宗匠く發句宗匠
よろしく第三にいひしてまでべし付合等く
任しくるものどもあかうさるこそのまる
發句哉こそ申すにことなりことにハ才に

申してこそ句ハまつしぬ姿情変化のこと
しかるにあるなることを付きるにもそのまゝし
發句ハ付子に任しく大分りワキハ
付也に任しく地ゆう第三ハ付寅に
任しく人也ことくふるくしそのう
ごくそのハ変化かまと定賢なるなとこうし
○百韻の運くしるハ是へくえあくこう
表にしたるのつ去りハ二句付合せまと
そのはさへ多く句の色がわく付をて
へど百韻あるもそのまゝ一座も終くま

ゆへにしをりくらゐ是にことも風月花韻の
本情をうしなはず三句めまで趣向といはず
め変化とするとぞそのほど付合やましと
三句めよし変化してこそ八一に人と位人の
変つまるとまで○く仲立とやいはんこゝろなく
付合之句へ叶ひてる也姿情てよしとせよ花
趣向しといはしめ花三これと下作ある内をし
けるは法を用ひるべきそんやよくくえぬものハ
変化とところならざるところあれど稀ハ人くらゐて
居所水急起居言動よりてうるを句ざる也

此物えりうしなへて掟しめさせて好作さうして
あるところし佗人掌上乃玉芙蓉ありくぞや四つ
乃花七つの月ごときまことこれをちかふ細領
されど詠物あるじあむきてけるべうずれ
月とまちむ花としろ○まことハまく句の作○
よ柳うつもしるも花しん花ハ高とちる
雪をまじみは八本れらゝ山のそまえ
不知くうけのハ定家そのうすも意あるも
どうるは物乃字かきこれよるぞどこ之ましむ
一花位人ころよ作りくし虚よろ實くく

入らぬならしぎの門なるべし　季意　流意
愚意とは雲井の罠鳴して下は猾木の
手まよはせ給ひ迷へしもれ侍るのみに
拙いていふはそべきこそるるや。いとこれ万韻
の珍膳ならし茶人茶の餅の
○丸　歌も人も年合とは如くこのれなり
本意なかるべしまつしりとるまよくき
かなしき惑乱はかまとめ志るれども年
の奥旨なるもおはしまさせしあらん
世笑られてこ笑るまじくや　翁曰　然れど

歌ともに先師も笑えふしく皮肉骨
の年合と四道といふ如此これいのときは
しかるべくし志らんどもそこのらう自由に
はなすともいふまいのそこに歌ともに笑ふしう
されく いかやも先師のひし道年月にし志ら
まだ何の例をもこれあきこ万韻の上に風月を
如此れるのしもでも三十くし志づくく
入門の風花に居ても附合はりきさすく比
のちくうとまどのきさとくてこのかうのいで
まで附合はりきさへくこの頃のられ以ゝのしくさん

世俗をしおかなるもこのめかすと出ぞ附合
ハりさくしはたのあけさし翁にらも思ふか
ろもこれかのよいそずと下の風流合法
もとも香ある合しもすそだ志りも一句の
そこの○ざるかどかゐるべきことなり舟
合点しと移だるも引きしろくおこし
うとざるハいる物とやこゆるんかもをまゝし
しかるひこてく川をみりしくてし姿情の
そこの○ざるいもうし付合併姿大切なし
二ならすろ四つの中の葉といへることも志た

らしはたのいろはならへし

○四道

○添 口傳

口傳

こゝしれし山乃秋風さそふらく
みる里さるもし衣ずかるも

○隨

志ら露風乃次しく秋乃ハ
はしつきこゝわ玉ぞむすびぬる

○放

契りもなかりしてよ袖乃袂志ほる

末乃松山波こさしとハ

○逆

○いにしへのならの都乃八重桜
けふ九重に白ひぬるかな

○四手

○掛手尓葉 口傳

古今 ○よひ〱にぬきてわかぬるかり衣
かけておもはぬときのまもなし

拾 ○暁乃なからましかハ白露乃
おきて侘しきわかれせましや

○着セてにを
引哥にあらそひ口傳
明しつゝみえそのよし

○重てにを 口傳

古今 ○志きしまやたかねにひく衣
こゝろもしらぬしもちりにけりかな

口傳 ○ミちのく乃淺香の沼のはなかつミ
かつミる人にこひやわたらむ

○相坂乃関に流るゝ岩清水
いはてこゝろにおもひこそすれ

拾 口傳 ○夜半の嵐に出まつこそ愛

まつ人のよいく夜へねらん

○當テてにん

千載

○月さゆる影乃よすかれなる

心してみるしまなのさと

○四畝

○惑乱

○春乃しれ夜のうきもしらでしけ

○ミのまけのうしとこ雲のそ

○理屈

○雲まれ物こけれ月のまくい

おもてまいかるるさい細き

○同字

并二字乃心也

○色はちらく春ハうすくさゆる木の本

うるひとるねく淋し絵

○異字

○つれしれ春霞山ハ春のあの

雲けまかろのゑ淋しき

○輪廻

月合乃輪廻なり

○遠境ハ情かきさ物なれやかしごのて世上流

流行もまさにめぐりてや風雅の人と結

ひけるとしげ乃頭の便りとて其角嵐雪ら

丈へ古はれ申しハ、その道すよかり申すよし来て

志られを六合としても、此法なされしや

翁曰

かゝるほどの名ハ何ぞとへしとて

六斎乃名目ハ、家中のしるしなれバ、うとあり

門友乃まさへくまそて家ホ交つまるかのわさ

ハ志られとも行ふ家の例しつとしとや

定賢ふりしかもよへうしは夜光も流らず

ハ也こゝ申しくこれらハかる辞色乃宥楼とも

そのまゝく賓人のまゝつけ哉とて一句を

とげさく申すまゝこゝしたまひさとハ花む

よ岸草の水よりし蕊をふりし　○花　いふ

ましくむれむ体志られしを愛乃家く

何の体にしこれらまて花草しもかかる

深ありて、ものかつハ門友れしるけとて

てもまゝせし乃者よりして申すまゝしげ

らや　翁曰　申しけるを申さとも　馨　移

体　位　見　入　響　二乃六体ハ三寿乃細

註ましきなり

○馨

口傳

○難波江の芦のかりねの一よゆへ
みをつくしてや恋わたるへき

○移

○田子の浦にうち出てみれは白妙の
ふしのたかねに雪はふりつゝ

○面影

○わかこゝろすみはつるよもすから
してきかの月そおもしろき

○位

○山里は冬そさひしさまさりける
人めも草もかれぬとおもへは

○見入

○つくはねのみねよりおつるみなの川
恋そつもりて渕となりぬる

○名にしおはゝ逢坂山のさねかつら
人にしられてくるよしもかな

○郷音

○小倉山みねのもみち葉心あらは
いま一たひのみゆきまたなん

○ちはやふる神代もきかず龍田川
からくれなゐに水くゝるとは

○句作ハよく地紙をよく正しくすへきもの也
この地をはなれてからは風雅なし これ
うちそのあらハ世上乃変化におうし
出てまさ流行にあらずれ至らずしていつれ
一字あまりとも切にやせんと短き語
材ありとくいうく客情を書きてべきやうく
くわんきんしくしくいう風情とさして
むへきことありまと風月乃情あらそく

古頭よろしくもあらまけれ乃 乃
あり句作の上手よまさく一句のこゝろを
よくやすらハこれ一ことしくすこれこうち乃
選人ともやいうさ母

〇四道六座のことは句合のつゞりに
作りて引合し

四道

〇添

鐵のら取捨こそ世にむかし　其角

荒垣に宿る行の法さき　翁

〇随

晩の寐言を舟に託されて　嵐雪

佐めに飛むすゞめを　翁

〇放

塔鳥に耻よ名残を寸意　翠兄

子稲ハ實を入る　晩稲ハさかりも稲花なき　一晶

〇逆

扇折る女ハ宿に捨られし　才丸

丈ハ江戸にも忘れられさく　揚水

六座

〇馨

蕪悲しが閑佐れくまして　其角

木枯の兆食に新の下に備て　才丸

〇移

酒の月お伽坊主の久茶くして　揚水

芸案流しける　奥乃泉かな　翁

○面影

水飲よ起て竈下よ月をみむ　翠江

咲ふる戸のとゝろきしきさえ　一晶

○俤

夕闌て宮女乃きぬをめりすよ　白君

大盞七つ星河瞽ひし　其角

○見入

狩場乃雲くけつ風と見え　其角

一夜堀置の衣ゝ故よ狼かくれし　翁

ましら鳥の庵よ迷ふ月　千之

盗人ととらふ鐘乃音更く　其角

○付合　雪氏

意行のれしてる身まうちよ　楊水

音更て枕の枯をとりこちゝる寸　翁

枯野宿よみゆまうむ大　其角

歎行る閨乃いろ旅いゝずま　東下

志らのし天下一番乃皃い　其角

文言か金もちハ金くと呼ぶ　下

●うつりと申するハつくらんおもむかれとて
発句付合なとハ何となく申也
なるほとくさうたてをまつり
付合のうちよい

四道

○添

●まへ句によ添ふて付るなし
其句乃信所見えこしいて
中しく流れなる姿なり

秋風や色てに宿かる天か下　其角
杉を産所にたてれは　破笠

○随

●まへ句によそへをかしいふまゝとまへ句に
こゝろてあまいて聞しるを流べし

明暮ハ干渡す松かゞ枝流し　挙白
命とおもへ船に追て解出　其角

○放

●付心法てきはなるゝところまへ句の
心をはなれてさて又まへ句て
うつりと申にに紛れしなり

游ぎありひにゆく夏野のよ　露荷
夕月よ急ぐ不他ととまる人　其角

○逆

●まへ句とゆくさきのそきれと
これとあらくに付てさへく
下心しく付ゆく也なり

昼も淋しこさくと雨の声　嵐雪

椎柏秋ハ日毎におもしろく　キ角

六ニ体

○馨

・ことバのにほひうちにあるを
むの句乃うけて中々まさると
がはれにし

梢いさゝかなる夕日乃松　キ角

禅僧乃赤裸なる涼しくて　流屋

○移

・其のうつりものゝ場乃うつりにし
その時うつりにハれとおもく案せよと云

弓張よりて鎌倉からくし弥生山　流屋

きのふハをとこさうしくゝのえて　キ角
まへ句乃併とのふし

○面影

人あれど見えぬあるのとおさへて　キ角

ひとれでひえしと雨にも寒く　彼作之

・雨よきて金ハ人あれども見えぬ
あのおもかげありけり

○位

・惣じて位ハ句ことによるなれ
ひさげとも一つの作ハまく
まへ句の位をとりて付合せ
山作

美女乃酔目長きのとて幕やとき　其角
契やでくるに奥乃繪でまく　致足

○見入

・まへ句にて一句して行ときのくるを見入ると
付る心なり

芳子よ酔つく毒乃水とくと　沾君
笛買てやなる添ハ人のしるく　露荷

○響

・付合てゆるちりなる物をひまく
ほけむ行くハゆかしこつなまく
句をとうてむ付心まくひ言く物とも

鶯ともゆ近きけびの草乃庵　其角
思事ゆるさ蒲團にぬれてく　数足

付合○変化

櫻原や猪ひしる道まげるく　野馬
男よつえんね女悦しさ　其角
哀くと姿へ入ると云はこさ　流屋

・猪ひしる山林なるは山あらしそ
あはれさえて八男よ足ね女悦
うるへさ旅へなりくと哀く
乃さハきて行くくるえし
行しき男の風情こそ三句の
あやう吟ようて行ゝ也や

山下風身とさへてやせぬらん　十角
吹はらふ毒の水をとて　沾君
留寳よする漆ハ人もなく　露荷

二 ○身とさへてといひて山下風ハ
深山幽谷の場とみれどもうし
の力にしらしと思ひしをきる
まるものかゝ入峯晩行者ハ
かゝる毒の水などもしるべき
付合なりと志かしと留寳を出る
それより山伏と貴賤なりよ付
也くぬるといふなるの場なの
人の變化よ付しなりけりじや

○この句解ハく写しちがひあるとみゆるそろ
ゆゑにしるしおくなり付合その外ゝ細評
句解ハ笑書よ記入　○句解ハ露九清書　翁注判
雲道　六花ハこれうちしもおハしまし
翁曰　よろしと世人のいひなるものこれ
のかゝ御かゝるへをうに

雲道

○漆
扇ちがひしこのもと傍ある調べをきゝ
あげし扁額ならさて哀く

○隨

理不盡に柄くみ破る鴛六七羽

ゆく〳〵牧乃御石擬ひしよ

○放

ゆく〳〵牧の御石擬ひしよ

賤乃一夜夕日と倶にゆく〳〵

○逆

京に酒屋醒の井乃水

玉河やあのし六乃布ぬく

六ニ陸

○馨

江湖くよ匂ふまゝ馨

卵売乃昌ろ麦じゆて流る

●そしまつまよ花しけしとこゝろぐ

白めて符合ハ志てつくまぎ

そのまゝ

○移

萋乃葉ふと志ぐろこの見へし常

本魚笑ひるふうんぞまししも

●むしの葉ふうれぐ水きえて

よくぐのど常とうち流れて心を

乃本魚よ伊くらまくうつろし

○面影

筆跡ハ人の俤なりといへれハ
添筆乃堂々たるをいふなり
・めでたき人の俤なりといへれ
参る長途乃あしらひなり

○位

位とハいかにもたる都鄙ある
内ハ魚ゟ儀こさぬのち
・位とハいはしき鄙乃位と
示す内ニ魚ゟいてちと合
なるなり

○見入

内ハ魚ゟ見いれざるのち
理不尽ニ掛ケ來る武者の六七段
・古しへ八将壇の備なとの
軍旅を魚ゟもち入る也
然れともき聖賢ニ及ぶとこく
人ハ目をくれて物ぐさき行
・二の太悪の色乃世ニ宿の心
ある夜やいまさらに八
大晦日のこゝろすましとて又
人もなるなる

○響

私は茶の湯の浦ちなり
飯を焚く人も頻に不信かれし

●松浦が御息女と望まる井
の方ふどへつきらん見てつかんだ
こもはくしく人のくさろひ遠き
付合やしるハ私の茶の湯の
折るる雪あり

○天地流行のまいうんにつて風俗流行のまい
うんにつて只此道ハ色の左かてよるとして守の
売よ上ハ可ことごの風味しつて下ハ木曽路の

績桶(ヲゴケ)とこ云よりなれ行茶ご不て在てもくさしされ
云ふつて格ハもいうんの格しして格のしてろ
のもいうんよりつたしてもさいろすよるのゑくれ
云さいハうすもるのぞく人かれてもいうんつけり
もいうんかれてもしんともかしどんなろて偽
悪しくこれ行あのしむよ行のなろむよう
かるん月かにしさ錦うして云行錦
世のしく存すんまそてこれなとをいうんやい
うよ富貴英雄ハ天下をするべしこの風月
そもそもするべうとハさてハ存句よなるしかくさ

歌の境、付合のいろしとおさとのむすびく
くこれ句味ふべきことなり、付合の付合
ざる句作のいろはあはせざる、作より作意ひつくん
てもうやいかん、口傳口授といへるなかし
神秘の混沌世界の一枚道徳仁義に
ちかあふしるかれ余

・右故翁の筆跡し、秋京二つ折よ
して名書ハなし、一軸の奥にく
うつしそ伝ふるおかんとする
さづて寛九子上京の節、秋の會堂
法師へなりかあし

六姿

○風（ソヘウタ）

・風といふはそのことのいろえへて物類
あらはにいはずしてしやいかも
そその義とさとらしむる

貞德
よかれとだ見どりふせんや柳髪

○賦（カソヘウタ）

・おもふさまみれいくつもかぞへいしかぞく
はくしく一体まてかさる事なし

貞德
ふまでしれ萩荻薄蘭桔梗

○比（ナゾラヘウタ）

・その紙そへて物に似せていふ

貞徳

はつねをぞうめにかへてなきはじむなる

○興（タトヘウタ）

・そく事ハかれによそへて事ハ似せたる心
風ハかくしてそれ興ハおもしろき比ハ
似ていふ興ハことにあらはす

貞徳

一かをハ秋風楽のこゑにちるかな

○雅（タダコトウタ）

・おもふことをありのまゝによめる
あらはしてかざりもなく姑すり飾を
いはずしてよめる

貞徳

鳳凰もすくふのどきをさこそ見め

○頌（イワイウタ）

君がみよをほめてよめる也

貞徳

信されぬじつれも飛梅のきてうのみ

○辞案

・これをよまるゝ四季の景物を
うつくしく人と称揚せんよ風
あるべし

・句よろしく物ゆたかとらで
かるみさうるゝハ賦あるし

名所なとの所々物によせてよくあらはる
はらんには比なし
四季乃風景をれくにまたらくむ
心ハ奥よく通すべし
雅ハ註解によらずも
人を殺しま納らでせんかへ
頌これゝくかあるなし

六姿

以上

長柄傳

法の体れ合ふに乃ちとは伝多也
いましい行の身体をすへてなくして
造乃字かれど字すり ツクル
畫乃字かれどもいふなり

八雲傳 切字

八雲しるいは法も 八雲垣 法あこれよ
御えのくさ伝へるをの八雲かさね
上ハ天のしるし あひ下ハ地のしるし
よくの事伝當合してその
おもはるしとし 口傳

○句合

何し處乃山なれ尾の花てうちの
なかくし後何誹りかてふほひ

・一首を二句のちいふ也けにそすれど
おもふこと何いふうしく風情
ニつまおハりなるしこれをちいつれ
にハ句切しさしきるものなりも

よの中よ道こそなけれおもひ入
山のおくにも鹿ぞ啼なる

・一首を一句のちいふ也けにそすれも
上よりきてとのびるべきをろちをも
なそれともなき詰しもひて下

・おもひ入山のおくにも鹿ぞ鳴
些しことをさんばと自問
自答しのひなるその詰未
ハうろくちるをいふ人に同答乃切
字なるり

○切字乃辨

○それ切字といふるハその詰一句に絶ゆる乃
名なりそろの詰一句に絶ゆるとハおもひわかてござす
月落烏啼の光てことばのおもむきの等しく堅情發し
その外おハるゝなり一安細を句へ云ひぬべくしも
何かしれやとも申しやそのてハなかるとそのまそ
其詰乃切字なるまで何てまるをてしるの詰一句にわ

紛れなきまで二番目を白にいふとぞつゞく衰微と
もなりくとたつるはいつゞくその詞の分明なると
云ふは一句して作者その語の分りやすからんとせ
風体に紛らはしく姿情しるべからんや切きて知る
の入所にいたりて切の辞案におもはれくその
語体全体といひ出るにも古代のこゝろべきこゝろ
なれもこゝに切字をさぐしめくく哉とく
まゝもとして此をりんと思ひきりでかはしず
切りかは行はれくこの語の体かる絶ゆべきなれ
切字と称するも元来句は発句に合力なるく風

姿は十一字ならねど一句にその詞絶せざれども
まへ句につれて更直しく詞のよくおかなるよ
やゞ掌に付てきてや發句はまへにかなふべきも
なれどこゝさてこゝにあまりに行はれきる
ミちなるもこの名句若とかのれなるは一句
におもふこゝでといくそでしく風情なれど
小おかりなるものその詞一句に絶えてつる
まし句切とおくとよ何とか發語して
下にこれ体のべきなるは向とこゝてかゝる準
たゞや問答切といつるもこれはかなふにれ

向谷よしもよし○どこその語乃始終何
こゝ乃へ至るまてく段語と下乃谷ろ所よ
その語絶しく切字ハいざるそのうち違
人ミて物うつく信ひ平句に長くなるともて
むし切字ハもいうへの切字のしく切字なれ有る
先きいうへまたうれ神乃御国乃道広く
上澤ハ雲井乃和哥に潤ひ下流ハ民
間乃まといふへよるて半埒して老て唯
蛍水に住し鮭夜乃字ニ田乃字ニ

貞室

○これハ〳〵とばかり花のよし野山

・これハ〳〵とばかりいふうち孫あるる
ましめ風情えとむに酔へつきや
まで〳〵平句に長してなるその切字
眼前付べしこれは新子孫なく
ハつによ十載を経るしうしれ事
未来何段絶ろんへそのうそむし

三段切

○五月雨ハこれ松風谷乃水

・上よミて初段語して中と下と
まその例ハさとるへし。これよくとて
へまてよその語絶して切字なきと

をいこん

○月よハ去る家ふ山ろうてざれちろ継

・月よハ去る家ふ再ほハ山ろうてざす、にこいハちけ継といくれも珍しきとあるべくこれふしとこてこへろよその語合あうとのみき

句切　其角文通

○かゝ路の松そちもち崩して

同答

○京清も色つえの庭ちハ七そ秋

ワキ引句
赤添　聞書

○清うね鐘むくかとねろきもくば

ゆのゝそて野の露さつ乃秋し

對句

○一うさ秋風楽乃琴柱ある

尾もりくて迴ろ乃袖

遠付

○草くふし萩萩露菊桔梗

鈴も響も名は鳴りすむ

項

○信けれどこ沿ても飛梅乃さくろくば

家ろん乃東風ゆつろき後

第三引句

韻字

貞徳
○春の来天下に名付るわかなかな
名あるものハ人ことにすなと

私依之句
○山の端を月影ならぬ桂川

其まゝ云ふ
掛てにも
・君の袖とかけるかいゝかけてと下るへけるをいひつゝあると
云ふさつて付合のやうに
しきろう

○三日月の眉と雲間に君の袖
云られて猫の翠簾をあけて恋
着せてにも
・掛てにも
掛てにんをいふてくるにあり
付合しろこそのやう

云ふれし猫のこゝろとも恋
○三日月の眉を雲間に君の袖
童てにも
・法師気とかまつりてちて
付合のうつくしさ
○らうたしと懐に寝る花の陰
気を繪に書く画の蝶
○當てにも
・まなこ云くる杯に御坊と
付てまて付合の定まるし
まなこ云くる枝に胡蝶かな
松風は何ともしらて沖の浦の波

寔に敬義乃ヿ言にて付切字ハ所付くる所なれバ
是をもて珎句といふもとハ一句興趣に備る也
多る也をを詐惑乱乃良策也付ワキ付第三
されたるべし能き句とかゝるをいはずとも
ワキに付かるに第三に風流たるべきなる也さて
発句と第三とハその器量が知らるゝ唯付合の
升要なるも同し切字に人口乃抜萃より同し
てトメに人口乃通達にて是を俳諧の稽古と
いふ也を知りて私をいふと云物と云と志でくて
も開新なる事を加しるす物也

元禄三午
七月二日
柏露丸
在判

○誹諧は王道にあらずして、志りえ多めへるなれ
一句の利しる教へて、和歌は一廉なりしく
まことの心は識れどもしさても和歌
よくせんの梅は中品よりいにしへ詠也
誹諧はにぎはしきものゝ正史なる
誹諧よりこゝも升其上細き義やて捨る
おも道の理すれて携のこの身は大和歌は
世にいふおもしい廉ならぬものにて和哥
に依事ゝく、きこゆりしもいふん、
此誹諧農風諌なり、あのまなあさましき、

人の作も其の文のいきほひにはぢらく
車輪の跡はしてこゝろく職の専家
はこれよりあらたむとし
發句を一巻の主君にして枝の葉み
は作者この前は千句百韻にしたしくし
ワキ句を吉君の輔佐にして風月一巻の
國家のおもしろきものゝ第三を為有句
の棟梁にして專ら風流の下行する
は者なし志のあるは發句を姿情山とれ
康りて一巻に一句の作意をさだめてい

あらはり志のまゝに我我相不一さけ
ていふは發句を風姿に心得事
まへ切字十八まかたをよく語路の深瀾の
おこまりのゝ平句にも切字をさの利て
發句しざりわ志有て教へるもの
求むしても先ヅ風姿の活んとする
ものゝ作禮は先ん尋道きりしてあれの
發句中の七文字の浴にの字の
さだまとたらして志を絶ばし猶は
風姿百句の上にも君ならば切字なく

くらも発句也としかし而已　口傳
○脇は発句に添たる風情なればたゞよ
そだてし巻頭の言に作りなしたまはれ
ものゝ安穏なる事寛かなる事専也
否利しくもいふなし　口傳
○第三は平句なれどもしかも発句に
要句にして一のまさりにして似合しく
ならん似せがたき我三の風姿しるべき
心あるまでしもにはあらんとも定め
多くありも第一として我三の風姿

加へんための志を廉遠は第一のみ事に候
しかも我心に随ひて姿を加へ志を羅ば有利
ありもせぬ事をも廉直にきこえなん附合は
是無くて此道の大本也人物の言動を
歎は走るの貴賤衣食遠近内外ところく
名句は風流を園りんして其人は女ゝ男
ゝ老若ゝの隔もなくゝ流くゝ気を
情をつくし志しく理を御自ら道理を
守利捨へもきはむし娩しく恥ゝ
しく附合すべきものなり此文三句

免は切りとしるゝを口傳ことさく一巻
は綱領なるを一二句附合せて一首は
始終なしとの人文附合する時は折紙
にあるは一風流なれば首尾一座は異忌
嫌者なれて一巻長短はつれもの忌なし
多利といもんか去嫌て見物して變化
神仙りとふくりしたる
三長句を傾城白拍子二心雑体文ハ
おもしろ其思ひのくらなしたる這はこ
しる気のさまあると二廉は生をとよく一句

乃心にもつて有る這しと定しものなり
依をば這四季しるもに二句一連は心得
安者としと云関は一体也口傳而不走破
といふ年口傳連歌なりと云ふるをくも
口授なりしてども我俳諧を作設平話
ればさしてもはなき志記有日中にもお
ふはばしたま言語のしとのへんの人は
い廉くてにこう志とがらやまぞ無き
ちうまばいあてさまいのらは句を新なく
いふ句も

○和禮和歌なり行雲回雪の躰といへる也
口言なりて款入に趣ある所羅なれは和
歌にもたくみはなけれはこそあれ志有
しも此小倉の道の庭訓なるべし
此俳諧も□□はしらる一部拾年より
去人も□□ば発句ワキ第三にも
姿情なく知らず□眼前の口只月
雲の□れたる□也とも□□十年
上下の風山のたゞ登りて後の十
年□□へし□葉の□立候

□味口傳風月の無真の家の誹諧(?)
風体きたる所の古今紀のみ唯此
道の心得としるべき事に俳諧の法
眞なる味とし□く舌頭に名聞なき
ものとて発句能附合の出来る者の
日本人乃仕合にしくはなき句能附合
出来かぬるも其日その人の不仕合之
高き所なりしてや□
所□たる□しむ趣き者也
○扨その所□□山□

人淡し／＼也和
、廉かき、翁はして
右者芭蕉庵翁膠漆之夜話也
元禄二歳文月五日
圖司露丸印

發句
涼しさも起ぬ乃鷹すゑて七部集
ワキ
霜月や鸛の彳々並居て
冬の朝日の安はれなりけり
第三
蛙鳴　小田に出待ころあまりや

○附合

東風風に又西吹かり北吹かり　惟然

我らは術が大事がるく　翁

後室は因幡を今朝屋敷かり　支考

嵯峨御所の御法名もさゝやき出　惟然

△皮肉骨附合

○皮

浦々の寺名所の人を海と利

おもひは明日を定夜なり

○肉

百姓の物しり四方志りて　塵

宰人の命は月に立ちかり

○骨

振袖のもすゝ娘清水寺参る

毎日をさりとて来る母親御元

三法

○有心

打こゝろにて道理を能抱

本御制して春をば納得し出来申候

○會釈

俳諧にて出家の事細かに申して

色ゝ思弁納ん得所

○通句

慣礼も大和に知ればかなふ事

十四日より十五日迄

右令口授者也

主

荷遊軒
東川

6446號
昭和38.3.14 受入

武盛堂
東